

〔抄録・未完〕

日本文学
に見る――

身障文芸

上

袴田利夫

〔抄録・未完〕

日本文学
に見る――

身障文芸

上

袴田利夫

《著者略歴》

袴田 利夫(はかまだ としお)

大正9年(1920年)浜松に生まる。

先天的に右眼失明左眼弱視のため、小学校卒業後1年経て、按摩の徒弟奉公す。

後に浜松盲学校を経て、東京盲学校在学中に衛生兵として応召。敗戦後、盲学校教諭から肢体不自由学校で機能訓練を担当し、勤続30余年で退職する。

現在、鍼灸開業準備中。

現住所 神戸市垂水区舞子坂2丁目4-6

[抄録・未完]

日本文学に見る身障文芸(上)

1982年4月25日 初版発行

著者 袴田 利夫

発行者 梅田 正央

発行所 関西図書出版

大阪市西区京町堀1-18-23

電話／(06)443-1012 振替／大阪3318 ㊦550

印刷／大阪エンタプライズ株式会社 製本／(有) 中村製本所

〈検印省略〉

落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

©TOSHIO HAKAMADA Printed in Japan

はじめに

第一章 盲は法を滅するか

——視力障害の部——

身障の定義	43
差別語を排して差別語を作る	52
身障者もそれぞれ孤個の存在	72
座頭略失	75
昔語と座頭	79
盲僧と平家	83
百人一首での盲歌人	102
盲人に取材した小咄	104
似た物夫婦	106
瞽女の事ども	117
瞽女の小咄	120

瞽女の民俗学	——画家斎藤氏の思い	127
現代の瞽女物語	……	135
謡曲「川上」に見る「生」のジレンマ	……	149
私の仏教試観	……	153
空海の身障観	……	155
人生の落差	……	157
兵庫県盲教育のあけぼの	……	161
神戸市盲学校今井校長の調査から	……	163
盲人文芸の落穂を尋ねて	……	167
ご存知「お里沢市」	……	188
盲学校の教師と生徒の作文	……	195
薄明の詩人 白秋	……	201
天平の盲僧	……	208
箏曲宮城先生の随筆	……	210
葛原勾当をご存知？	……	215
盲目の漢詩人	……	218
盲人ジャーナリスト	……	221
盲歌人宮脇武夫	……	224

盲俳人望一のこと 225

春、庭、馬、琴、夢、想、庵 233

研究集約した遺著 235

カードは語る 235

春庭を助けた妻と妹 236

意力の限界を示す 236

八方破れの生き方をした盲文士 242

途中失明の元女優さん 245

幅広い行動 247

光戻った夢 248

森公興に乗る 250

第二章 癩は天啓でもあった

レプラに克った記録 257

聖書に見る癩者 261

救癩略史 262

時代閉塞の中に生れた癩文学 266

自描に燃えつきた海人	271
自序 癩は天啓である	272
「絶対否定」即「絶対肯定」	277
古い探偵小説から	284
出藍の誉の松本君	287
癩を詠った詩歌	290
癩者の健常者との触れあい	303

第三章 いざ生きめやも — 結核者の文学

肺結核の病理	309
国民皆兵は国民皆病であった	316
結核文学は花ざかり	318
全身これ結核に蝕ばまれても	322
子規を少し詳しく	325
子規を聞く（読み下し文）	326
胸おどらせて従軍	334
発句にならぬ嘆き	335

写生主義に徹底	336
もう一人神戸に縁のある偉人	337
ヨハネ伝に現われた贖罪愛意識	339
貧民街の家に住む	341
もらい子殺し流行	341
労働運動の指導者に	342
あと断たぬ訪問者	343
結核の歌人たち	344
梶井基次郎の最後	352
結核減少に伴い失われ行く文学	354

第四章 音なき音を聞いた人々

——言語、聴覚障害の部——

聾俳人のこと	360
江戸の聾者	370
聾詩人林さんのこと	373
耳鳴りに悩む	374

石 376

龔児の作文 393

「金閣炎上」をめぐって二人の作家 398

第五章 神に最も近い人々

——精神障害の部——

怨霊を信じた古代の純粹 409

裸の大将のことども 413

昔話に見る白痴 421

知能障害は本当のアホか 425

與ひょうは汚れて行く 431

精神障害者の描く世界 438

利口と馬鹿の境 447

一時代先を歩むは変人か 449

テノール児の半盲 452

蕉村のあたたか味 453

日本人の心奥に潜む「恕」を見直す 455

はじめに

「機能訓練とその周辺」を^{めぐる}続つての一項目とは言え、私が年来温めて来た「日本文学に見る身障文芸」考の要旨を抄録としても本書に加えるには少々ためらいもあるが、而も未完であるとの自省も先立つけれど「その周辺」なる文字に事寄せ、自分勝手な都合のよいように拡大解釈するのも、脳性マヒを中心に据えた身障対策への僅かなりとも参考にして頂ければ望外の幸せを念じ、自己満足^{まじ}の筆を進める愚をご寛容賜わりたい。然し、このように独立した一書に纏^{まと}まって見ると「廂を貸して母屋を取られた」形になり、何となく面映い感がないでもない。

身障文芸への私の試案

先ず、私に於ける身障文芸についての関り合い等を簡単に要約し定義すれば、次の通りである。

1. 身障者をテーマに求め、又は主役を演ずる文芸とか
2. 或は身障者自身の筆に成った作品を言い、そこから身障者ならではの人生観、乃至は^{もの}事象の見方を探り
3. その文（芸）学が生れた背影を通じて、社会と身障者との関連性を解（とき）明（か）し
4. そこから身障者の置かれている時・所・位、それと共に機を自（覚）認（識）して－
5. ひいては、東西文化の比較と計ってとはと柄にもなく大上段に振りかぶり過ぎるにしても、その面からも人間の在り様を再検すると共に

6. 身障対策を通じて「福祉の受授」に際し、適正な運営を誤らないように

7. 身障者自身の「生態」を凝視め、道德教育の一環として「鑑」足りうるを目的であることを定義すれば

横田高松盲学校長の卓見

社会（科）的な句を含め些か修身臭くなって来るが、この点について必ずしも、私の思い上った独善でもなさそうであると知ったのは、戦前から大阪府立盲学校に奉職された私達の大先輩である横田全治先生は、香川県立高松盲学校長在任中惜しくも急逝された同氏が、少壮気鋭の頃、諸国盲人伝説集を戦後逸早く刊行されて間もない昭和二十五年、財団法人青島会が編集された特殊教育会（報）を主催し、その一冊に青島会叢書第四号をその五年程経ってから発行した。その十二頁に約半分を削いて第三章を設け「まとめ」の項に次の様に記述されているので今その全文を転写する。

「盲人伝説と盲教育とのむすびつきに就いて最後に一言し本稿を終わりたいと思う。

結論を先に申せば要するに「私は今日の盲教育にもっと精神教育面が高揚されねばならぬとすれば、盲人史の一科を社会科の裡にでも、是非取り入れねばならぬのではないかと思っている」。

社会的に盲人の問題が本格的に取り上げられたのは、これを我が国で奈良から飛島の七々八世紀迄に遡上る事が出来る。然るに西欧のそれは十字軍前後の十一世紀頃からである。更に又、盲人が職業を以って独立生活を始めたのは、鎌倉末期の十三世紀であり、西欧のそれは十八世紀末

としなければならぬ。この事は我邦の盲人が少なくとも過去に於いては、世界に類のない逞しい豊富な社会生活を持った事を示すもので、その間彼等が時世に順応して職業を守り、独立を尊んで問い続けて来たものである。

さて、かかる貴重な体験と足跡は、当然これ現代の盲教育に取り入れられて然るべきである。

されば盲人としての今後の生き方に大きな示唆を与えるのみか社会にとっても亦、文化財たるを失わない。年間一単位を構成する内容は、充分備えているが、差し当つての具体策は医学史二単位中に絡み合せて教授するべき事を吾人は、唱導して止まない。

こう考えて来ると上来述べ来たった様に盲人史の重要素材としてのこの種の伝説集の解明という事は、決して閑人の手すさびとは言えないのである。まして一般史との関連性を考えれば、この方面の仕事も等閑にさるべきでなく、その担当者は我々を借いては当分見当りそうもないと思われる時、この感じは一層深くなる」と。

これは驚くべき創見である。殊に「鍵括弧内に挿んだ」のは驥尾きびに付すべき後輩たる小生が、先生のご了解を得たくても既に故人になられた故、天に向つてお詫びをするだけでお断りなしに拝借させて頂くのであるが、この「鍵括弧内の条り」は、嘗て昭和五十年にも近い今日読み返しても必しも古い所か、むしろその必要を痛感する事頻りである。

又、これら「括弧」内の「盲教育」云々を「肢体不自由児教育」に置き換えれば、その「精神教育面」を提唱される横田先生の用語が時代的な古さの故に止むを得ないとしたら「身障福祉を

受授する心構え」が「高揚されなければならぬ」今日、養護学校高等部の社会科の裡に、身障史の一科にでも「是非取り入れ」私達身障者が置かれている因縁、もう少し具体性を持たせて言えば「歴史・社会的な位置付を自覚々他」以って将来へ向って現存在への対応は、社会全体への責務であると共に身障者個人の在り様、引いては「誰でもが笑って疊の上で大往生出来る時、あゝ生きて来てよかった社会」で「あったと思う」のは「自らへの福祉の原点」を自分で創り上げ、発見する「青い鳥」に「道は近きに」あるのではないか。

今、この大先達の遺志に触発されて私流の表現に置き替えたが、この思想を二十余年も前、既に来たるべき時代に於ける「福祉への取り組み方」に一つの方向を示した精神の問題を昭和二十五年に洞察された構想は、流石に時流を超えた卓見であり、素晴らしい。

養護学校へ転任後、暫くしてからこの横田先輩の独創を踏まえこの必要を痛切に思い、肢体不自由児とその家族、殊に母親を主として道德教育を主唱したのだが、「来てまだ日も浅く学校もよく分からないのに生意氣を言うものではないし、それよりもお前ら盲と一緒にされる程、肢体不自由児は落ちぶれてない」と叱られ、なる程「鵜の真以をして溺れる鳥の類」とは、「不徳の致す自分の事か」と、自らのホゾを噛んだ苦い思い出は消えない。

身障文芸への緒口と資料

身障文学等のジャンルは、文学辞典その他に見られないのも当然で、昭和三十〇三十五年あたりにかけて便宜上、私が独り善りな仮説として勝手に唱えたもの故「お前が一人だけそう思っ

いるだけの事を他に取り上げられるかどうか」の有無は、全くお読み頂く志向^{むき}のご見解に依らねばならない。それだけに頗る頼りにならないものであるとの前提で、ご批判を賜われれば幸いである。根拠もなしに「こうなのだからこう考えよ」と強制するのは相手を無視する態度故、それは許されないので能うる限り一々出典を明きらかにした。この身障文芸考の粗末極まる試みが、何かの役になって拙稿を俎の上にのせ料理される物好きな御仁と喻えたら失礼ならば、ご高評下さる学徒がいらっしゃるならば、更にこの雑文を叩き台に発展させて頂いたなら、私が投じたこのさやかな捨て石ともなり、これをステッパにして下さるなら縁の下小さな力石であっても私は満足である。そのために能うる限り引用を明きらかにし向（好）学の士かご厚（好）意をも含めて私の間違いを正して下さる時のご参考にして頂けば、としても今となつては、再読も殆ど困難に近いものか絶版になっているのを百も承知していながら「そんなエエカッコしいは一種のカムフラージュに過ぎない」と、ご叱正を賜ってもそれも亦やむを得ない。こうして出所を明示するかの様な大義名分に名を借りて内容もない鼻の高さを誇るつもりもなく、その都度根拠にした資料を誌したか、決して弱視の自分が読んだ本の量なんて知れたもので、そんな一握りの読書量ぐらいひけらかしての図々しさや銜学のいやらしさは毛頭ないつもりである。むしろ己の非才をカバーすべく、いわば他人の輝で角力を取ったずるさの証拠に過ぎず、出典調査を最も効果あらしめよとしてお世話になったお札に出来るだけ書名を明きらかにしたのである。その中で殊の他ご恩を恵まれたのは、昭和四十三年前後に、中央公論社が出した折口信夫全集の全三十一巻であり、特に盲人関係については、昭和四十五、十六年にかけて筑摩書房が定本柳田国男集の全三十五巻で

はその学恩が余りにも多いため一々頁数を紹介する煩しさを略した事はご了承頂きたい。

日本文学に材料を求めながら案外期待外れだったのは、古典日本文学全集であった。これら充分活用し得なかった私の受け入れ機（器）能が不良で「宝の持ち腐れ」「猫に小判」の類でもあった、その他、特異な辞典出版で他社の追従を許さない東京堂の各専門に分かれた辞典類からは貴重な示唆を賜ったし、口承文芸総合事典のキャッチフレーズで弘文堂が昭和五十二年、民俗学とその周辺に関する隣接諸学に関係する当代一流学者を総動員して福田氏他四名の手で編成された日本昔話事典は常に座右から離し得なかった。その他、大塚民俗学会が総力を挙げて結集した日本民俗事典等々、数えれば何分にも夥しく煩雑かと懸念されるので主な代表だけに止めた。が、免も角賛否何れの評に傾むこうとも、それは読者諸賢の選択を尊重するにしても、角力は同じ土俵で勝負を争うべきと考えるのだが、事程左様に一般受けもせず、共通理解もむづかしいと非難されても、それは不徳の故であってやむを得ない仕儀だから甘んじて受けもする。目も悪い上、浅学の私故今まで公にされた文学書や、その他の資料は恐らく汗牛充棟を以ってしても尚、余りある文献を漁り得るのは到底私一人では不可能な事であらうし、また出来る力もない。

そんな出来もしないことに挑戦して己の惨さを敢えて求める愚は試みないものの、記紀万葉の古典から出発し、敗戦前後までを含め「最早、戦後ではない」と、吹聴された昭和元禄の時代を経て刊行された日本文学で、しかも、私が見聞きしたものの中から選んだのだから、その範囲たるや極めて浅い。主観に基いて取捨したのでから限定もされ、身体障害者手帳一種の三級による弱視者である私の視野と同じく非常に狭いものである事は、むしろこう言う駄文を並べか

なくとも済んだであろう恥じの上塗りであったと前置きし、お断りをしていた方が安全らしい。

琴の音は悲しきものぞ居候すかぬの眇すかぬの幼な日泣きて聞きしを

タレントの目のきららなるを羨うらやみて眇すかぬにあらざる来世を願いぬ

日本文学でさえこの体ていたらくだから、逆さかも古代中国を含めて東洋の文献、例えば仏經で身体障害者をどう観みていたかはもとより、欧米で書かれた所謂外国文学にあって、伝説らしいが史実では信じ難いとの説もある人（？）によって作られたとされている「イリアッド」、近代ではエスペラントの盲詩人として来日し、東京盲学校へ留学を機に、国際語の普及を図り日本の盲青年達にその種を蒔いた後、北京大学教授となったエロシエンコは、代表作に「夜明け前の歌」等があり、又「盲人書簡」等私でさえいくらでも容易たやすく思い浮ぶのだから、専門家には到底太刀打ち出来るものでない故、初めから諦め手をつけないで逃げた方が「祭らぬ神にたたりなし」で身障文芸（稿）考の目指す一つの目的である「身障者を繞まわる東西文化の比較論」も、羊頭狗肉の看板倒れになるのを自覚しつつも、私には文学の全分野に目を通し得る業ではない。

こうした中から私が身障文芸稿の企画を固める迄、神戸市立盲学校で専攻科の諸君に医学史を講じていた私は、中でも日本に於ける医事現像を主として取り上げた。殊に針灸按マと言っても

明治開国以前には勿論マッサージなる外国語は一般に通用する筈もないので按摩術あんまとそれを業とする者は殆ど盲人だったからそれらを主題とする川舩その他に限られていた。と断ったのは、俳句の鬼貫のように、目明きでも生活の手段に按摩笛を鳴らした人も居る他、あんま玄碩と異名を残した人物もあるので「殆ど」と幅を持たしたのである。

日本医学史は、その創始者でもあり、また同名書の著者、富士川游によって明治の中ば過ぎに完成された労作であるが、今日にあっても尚、学界の古典であるばかりでなく、医学史を学ぶ者にとっては、常に机上に置くべきこの大著や、その他の関係文書に拠れば、土生玄碩は江戸末期の蘭学で幕府の待医となり眼科を得意としていたが、文政十二年シーボルトに眼科を学び、その手術に絶対不可欠な散瞳剤を手に入れるべく代償に將軍より拝領した葵の紋服と、アトロピンを交換し、日本の眼科学の発展に尽したが、後で偶発したシーボルト事件で運悪く発覚連坐した彼も亦流し按摩である。流し按摩で一時期ではあったにせよ生計を立てたけれども、これらは全く例外中の例外で、一昔前迄は、

腹を揉む 座頭に琴の姿あり

等の江戸舩川に描かれた様に、按摩即盲人であった。私自身も流しの体験から、うら悲しい按摩笛のイメージは、路地裏をとぼとぼと杖を頼りに危なっかしい足取りの、「杖突き虫」のうらぶ